

ひとり立ちへの旅



ある絵かきの誕生

佐伯和子

ちくま少年図書館 68

心の相談室





ひとり立ちへの旅

ある絵かきの誕生

佐伯和子

ちくま少年図書館 68

心の相談室

289／ひとり立ちへの旅——ある絵かきの誕生

著者略歴

1935年広島県に生まれる。中学卒業後美容師となる。58年上京，自由美術に出品。64年渡仏，絵の勉強をつづけて現在に至る。画集に『野山の花』などがある。

筑摩書房／1982年初版
222pp./20cm/四六版



1982年10月15日 第1刷発行

1988年2月25日 第5刷発行

著者 さ えき かず こ
佐 伯 和 子
発行者 せき ね ひで さと
関 根 栄 郷
発行所 ちく ま しよ ぼう
株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91/振替東京6-4123

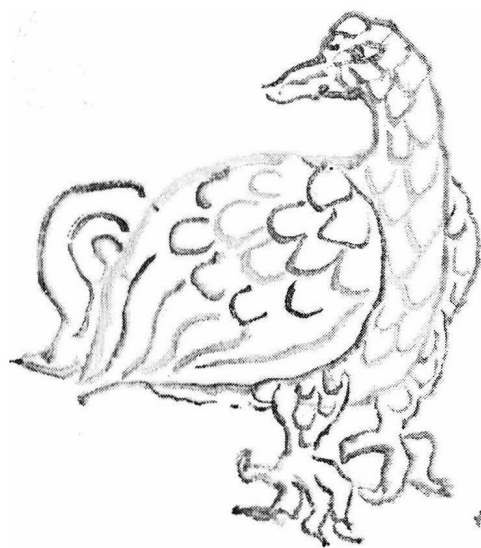
© K. Saeki, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

ISBN4-480-04068-4 C8076

乱丁，落丁本の場合は御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ひとり立ちへの旅——ある絵かきの誕生^{たんじょう}





もくじ

瀬戸内せとうちの小さな町で

絵をかきはじめたころ

7

戦争とわが家

15

床屋とこやさんとカミソリ

18

熟うれすぎた桃もものような

21

自分の名前を忘れる

26

十七の年のこと

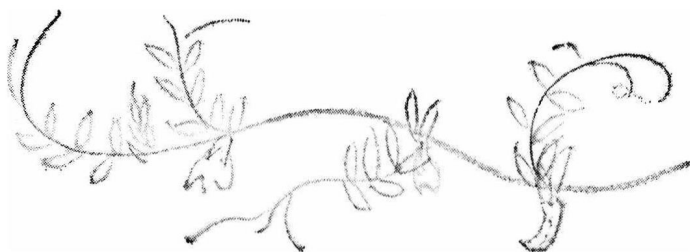
29

姉の死と一大決心

33

美容院とヴィナス

38



長田先生をたずねて 41

女流グループのなかで 45

青美のころ 50

倉敷をたずねる 53

ふるさととのわかれ 58

東京にひとり出て

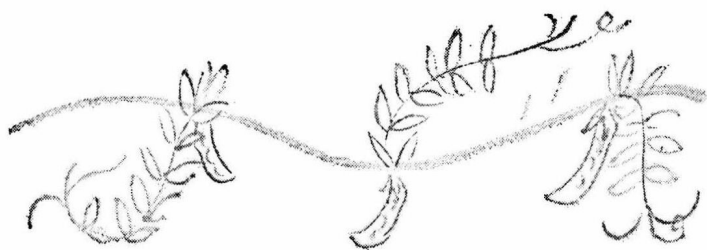
カスバのような町 62

わびしい銀座の夜 67

中美にはいつて 72

おかしいことばかりの初入選 77

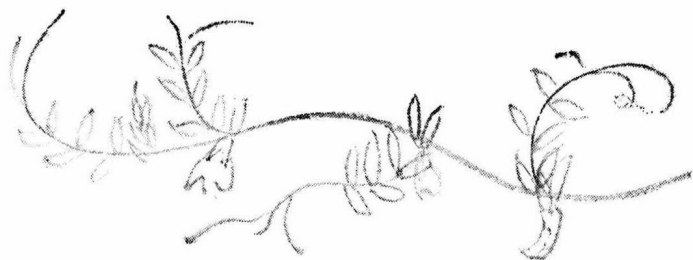
グラフィックデザインの仕事へ 83



世の中は皮肉です
 地図の上の赤い線
 船出の日
 99 89

フランスに遊んで

三等船客の仲間たち
 ハンスト騒動も
 秋になっていたパリ
 ベルギーへの小旅行
 語学からの解放
 日々の暮らし
 スペインへの旅
 113 120 127 133 140 142 154



日本人である私 166

スイスとイタリアへ 173

パリの絵かきたち 182

私自身の絵へ

帰国して 187

結婚とそれにつづく転機 194

浦上玉堂に出会って 201

私自身の絵へ 209

あとがき 220

さし絵、装幀・著者

瀬戸内せとうちの小さな町で

絵をかきはじめてころ

展覧会などをしていると、

「あなたは何歳なんさいごろから、どんな理由で絵をはじめられたのですか、キツカケは？ 家庭環境かんきやうは？」

などと質問されることがあります。そのたびに、これといっではっきりした理由もないので、

「中学のころからなんとなく」

とあいまいな返事をしてしまします。

私のまわりには、ピカソやクレーなどが育ったような芸術的な家庭環境もなく、棟方志功が「わだばゴッホになる」と自伝に書いたような、特定の画家との強烈な出会いもありません。ただ小学校のころから熱心にかいてきて、中学を卒業するころには、この道にすすもうと自然に決めています。

私は広島県呉市の吉浦で、洋服屋の娘として生まれました。父の家は祖父の代まで、長州藩につかえる武士だったのですが、父はおおぜいの兄弟の末っ子で、しかも事故で耳に軽い障害があり、上の学校にも行かせてもらえず、職人の道を選ばざるをえなかったのです。きちんと学校を出て、それぞれ一応の社会的な地位をえた上の兄たちとちがって、父の人生にははじめからかげりがあつたようです。

母は、舟を持って瀬戸内海で運送業を営んでいた家のひとり娘ですが、父に同情して結婚したらしいふしがあります。その結婚はかならずしも幸福とはいえなかったようです。

私は七人兄弟の三女です。兄がひとり、姉がふたり、弟がふたり、妹がひとりいました。貧乏でしたし、めぐまれていた家庭とはいえませんが、しかし、私たち子どもはそんなことにはむとんちゃくで、ひまさえあれば、すぐ近くの山や海に出かけて、まっくろになつて

遊んでいました。吉浦は、呉市とはいっても、いくらか都会的な呉の旧市街とは山一つへだてられています。おだやかな瀬戸内海に面し、海辺にまでせまる小高い山に囲まれた小さな小さな町です。

この小さな町は、むかし、海が現在よりもっと陸地にはいりこんでいて、アシのおいしげる寒村だったそうですが、私が育ったころは、山の中腹まで家がたてこみ、海岸には造船所などもできて、ほとんどの人はつとめ人になり、むかしのおもかげはありませんでした。

それでも私の子どものころはまだ、食事どきになると、すぐ目の前の海でとれた魚を手押し車にのせて、いつものおばさんが、

「おごーさんわちゃーどーの」

と声をかけて通りました。

「おくさん、ワチはいかがですか」

という意味ですが、その声を聞くと、ザルなどを持って買いに出たものです。

車のなかには、季節によってちがいますが、タイやチヌ、スズキ、カレイ、ヒラメ、オコゼ、ワチ、コイワシなど、海の幸がはねていました。当時は、お祝いごとにはもちろん、



病気やお産のお見舞いにも、それぞれに応じた魚を漁師にたのみ、青い葉っぱをしいたカゴに入れてとどけるのが習慣でした。

瀬戸内海は、よくおだやかな女性にたとえられますが、しかしやはり海です。危険がいっぱいでした。子どもたちは小さいときから海になっていましたが、年に何人かは水の犠牲者が出たり、台風などで舟がしずみ、死体がうちあげられたりしました。それでも近所の子どもたちは海をこわがることもなく、小学校の低学年のころには、ほとんどの子どもが自然に泳げるようになりました。

それも、乱暴な話ですが、一度や二度おぼれかけて、ひとりでに泳ぎをおぼえるのでした。私も、ガックリ、といって、急に海が深くなっている場所にあやまっておちこみ、死にもぐるいでもがいたおかげで、水に浮くキツカケをつかみました。

夏は、朝から海に出かけたきり、食事どきにならなければ帰ってきません。昼も食事がすめば、またとびだしてゆきました。一日中、まっくろになって泳いだり、ガドウ、といっていた海辺のカニをおいまわしたり、海藻に産みつけられた魚のタマゴを見ついたり、自然に岩に付いているカキをとって食べたり、すっかり磯くさくさになって帰ってきました。そんな海での遊びとともに、私は小さいころからよくひとりで絵をかいていました。同

年の子どもたちよりは上手じょうずだったようです。小学校のときにも先生方からよくほめられて、注目されていました。かいた絵は教室にはりだされたり、兵隊さんに送る慰問袋いもんぶくろの中に入られて戦地に行ったりしました。そんなこともうれしくて、熱中していったようです。

私には、熱中するというか、なにかはじめると、なにもかも忘れてそれにひどく集中してしまいくせがあり、妹が着せかえ人形などを持ってきて遊んでほしいとせがんだりすると、じつに熱心に空き箱あきばこなどで部屋へやまで作ったり、芝居しばいをさせたり、たのんだ本人がとつくのむかしにいなくなってしまうてからも、ひとりあきずに没頭ぼつとうしていました。そんなときは、いくら名前を呼ばれても、まったく聞こえないのでした。返事をしないと家いえでよくしかられましたが、そんな私の性格や、先生にほめられてかいたこと、それがどうやら絵に深入りしていったはじまりのように思われます。

昭和二十三年（一九四八）、新制中学発足の第一回入学生だった私は、男女共学を不安に思った姉たちのすすめで、私立の女子中学に入れられました。そこで、それまでまるで知らなかった、絵かきの先生や石膏像せうこうざうや、油えのぐ、画集などに出会いました。急に一人前いちにんまえになった気がしたものです。

さっそく美術部にはいり、生まれてはじめて木炭を持ち、ヴィナスの石膏像に取り組み

ました。着色画はおもに水彩すいさいでした。先生はどうしてか、私にはどのようにかけということとはいつさいいわれません。しいて聞くと、ただ、

「自由にかいたほうがよい、佐伯さきの絵は特別だ」

と、ここでもおだてられて、ひどくいい気分になっていました。

そのころのわが家は不幸つづきでした。昭和十九年には生まれたばかりの弟を、つづけて半年後には母を亡なくしました。私が中学二年生のときには、文化的なものへのあこがれが強く、私の絵をたのしみにしてくれたすぐ上の姉も、結核けつかくで他界しました。兄は仕事で家をはなれてしまい、長姉も結婚けっこんしてやはり家を出ていました。家に残されたのは六十歳まじをすぎた父と、私、そして三歳下の弟と、六歳下の妹の四人だけでした。

私はにわかに家事を引き受けるママ姉さんになったのです。ママ姉さんの私は、からだも小さかったせいにかく疲れつかれ、「どうして私だけが」と不平たらたらでした。手伝いたがらない弟や妹にも八つ当たりをしていました。

そのため中学の朝の掃除当番そうじにもよくおくれました。事情を知っているクラスメートは、私が「ごめんなさい」というだけで、いつもやさしく「いいわよ」とおお目に見てくれましたが、ある日、私が「ごめんなさい」といっても、いつものように快い返事が返ってこ

なかったことがあります。「いいわよ」とことばはいつもと同じでしたが、「いつもいつもなによ」といったニュアンスに聞きとれました。

自分でかってにそう思っただけかもしれませんが、私の中には許されるのは当然といった気持があつたようです。それで腹がたつてきました。

なにも私がおこる理由はないはずです。

「こんどからちゃんと来るわ、ほんとにごめんなさい」

と心から思い、そういえばすんだはずでした。それなのに、私は間髪かんはつを入れず、

「放課後の掃除はひとりでするわ！ それならいいでしょう」

といい放つたのです。おかげでその日の放課後、手伝おうと残っている級友までみなを追い返し、汗あせだくになりながら、たったひとりで教室の掃除をするはめになりました。

そんな、意地っぱりであまりかわいげのない、感情の激げしやうい私わたしが、暗くしずみがちな家庭環境かんきやうの中でどうなっていくのか、今から考えると、先生方を見かねてたいへん心配されていたらしいのです。なにをしでかすかわからない、といった感じがあつたにちがひありません。ですから先生たちが私に熱心に絵をかかせたのは、私に画家になる素質を見て、それをのばしてやろうとしたわけではなく、生徒指導の一方法だったのでしょう。私